

この本、
いかがですか？

“ 新生児医療を目指したくなる魔法の本 ”

評者

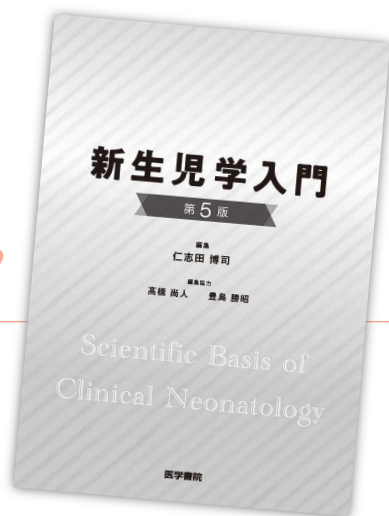
内田美恵子

埼玉医科大学総合医療センター総合周産期母子医療センター
副センター長

『新 生児学入門』というタイトルの本書であるが、この本には「ピンクの本」というかわいい別名がある。30年間、私も含めて新生児に関わる人々に愛されている本書は、私たちにとってバイブル的存在である。スマートフォンで何でも調べられる現代でも、本書は新生児医療を志す人々にとって机の傍らに置いておきたいかけがえのない1冊であり、この本を持つだけで、新生児医療に携わる同志であることを示すアイテムでもある。堅苦しい専門用語で会話するより「“ピンクの本”に書いてあったよね」と話すだけで相互理解ができるのである。

著者自身が教科書ではなく“新生児医療関係者の愛読書”を目指したように、この本には医学書らしからぬ表現が随所に認められる。たとえば、30年前は呼吸窮迫症候群の児が入院すると、出生から72時間の期間を自分の技術と体力を最大限発揮して、気胸、動脈管開存による状態の悪化がないように勤務時間を過ごしたものだ。それを経験した医療者には、サーファクタント補充療法を“ドラマチックな効果”という表現で記載したい気持ちがよく理解できる。サーファクタント補充療法が当たり前になった今の世代からすると大げさな表現かもしれないが、この本は、読む世代によって文章の受け止め方が異なることもユニークな魅力である。

“赤ちゃんとお母さん”に命を賭けている著者の信念と人柄が表れている文章を探すのが面



新生児学入門 第5版

仁志田博司 編集
高橋尚人／豊島勝昭 編集協力
本体 5800 円＋税
B5 判／医学書院／2018 年

白くなるし、印象深い文章を人に伝えたいのだ。この“伝えたい”という読者の思いは、繰り返し他者に伝えることにより短期記憶から長期記憶に変わり、改めてその人の信念として身に付いていく。その魅力を感じ取った人は、知らず知らずのうちにこの本を読み進め、いつの間にか新生児医療を自分の言葉で語れる人に成長していくと私は考える。そうして、新生児医療の魅力に引き付けられていった人も多いと思う。

私も出版当時からこの本を愛し、読み続けてきた一人である。私は新生児病棟に入職した新人には「分からなくてもいいから、“ピンクの本”を3回読みなさい。そうすれば新生児看護が好きになる」と話している。この本は、新生児学入門と題されているが、新生児医療に足を踏み入れたくなる魔法の本だと私は思っている。

最後に若い人たちに伝えたい。新生児病棟に足を踏み入れたら、“ピンクの本”を3回とは言わないが、忘れたところは繰り返し読んでほしい。きっと赤ちゃんたちへの想いが湧き起こるはずだ。